

血の九月

福田は深川の小さい町工場で、フライス盤を見ながらいた。かぞえ年十六だったが、ずう体が割合に大きく、おとなびていた。

一九二三年九月一日。

彼は正午までに五十のナットを仕上げるつもりで、汗をふくのも忘れて、作業に夢中になっていた。残りはお二つ、これだけやってみれば昼飯にありつけるのだ。ガラ、ガラ、ドドン、ドドン……

彼はとっさに、近くの工場のボイラーが破裂したのだと思つた。半カ月ばかり前もいちど破裂して、工場の一部を破壊して、けが人を出した事があつたからだ。そして、今も、あの時と同じような恐ろしい轟音と、激しい震動を全身に感じたからだ。

「あつ、地震だ！」

だれかがほえるような声を立てた。とたんに、福田は後頭部に重いハンマーを打ちおろされたように感じて、

一

昏倒した。あとで分かったが、うしろの棚の上に置いてあつたベアリングが彼の頭の上に落ちかかったのだ。

十五分もたつてから、彼はやつと正気づいた。工場の軒下の、湿った土の上に寝かされていた。まわりに職工が三、四人いて、彼の顔に水を吹きかけたり、からだをどやしつけたりしていた。

「おや、気がついたらしいぞ」

「吉公、しっかりしろ」

福田はうなずいた、そして半ばしびれたようなからだを、やつとの思いで起こしにかかった。

「おい、大丈夫か」

「大丈夫。ありがとう」

彼はどうやら起き上がった。うしろ頭がずきんずきんとひどく痛んだ。気がつくくと、頭は白い布で無細工にぐるぐる巻きにされていた。

正気づいてしまえば、もうだれも彼なぞに構っていなかった。彼は痛みをこらえて、まず工場の中へはいつてみた。旋盤、ボール盤、フライス盤、研磨機、モーターのような固定した重い機械は、とにかく原型と位置を保っていたが、他のものはたいていこわれるか、吹きとぶ

